授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1991 号

The prognostic significance of the positive circumferential resection margin in pathological T3 squamous cell carcinoma of the esophagus with or without neoadjuvant chemotherapy

(食道扁平上皮癌における深部切離断端距離と予後との相関に対する補助療法の有無を伴う影響)

岡田　尚也（おかだ　なおや）

博士（医学）

論文審査結果の要旨

本論文は、食道扁平上皮癌における未だ明らかになっていない食道癌外科的切除術後の環状側切除断端(Circumferential Resection Margin; CRM)陽性の基準に関する論文である。CRM 陽性基準には腫瘍から切離断端までの距離 1mm 以内を断端陽性と定義する Royal College of Pathologist (RCP)と、腫瘍が切離断端に接している場合のみを断端陽性と定義する College of American Pathologist (CAP)の二つの基準がある。我が国においては深部切離断端(RM)に関する規定はあるが距離に関する基準はない。当科にて根治的食道切除術を施行した食道扁平上皮癌症例における RCP と CAP を用いた深部切離断端の距離と予後を解析し、CRM の診断基準を検討した。また,補助療法の有無による CRM 評価と予後との相関に対する影響に関しても明らかではない。補助療法の有無と CRM 評価別に予後を解析し、臨床病理学的意義を明らかにすることを目的とし、1997 年 1 月から 2011 年 12 月の期間に、当科にて根治的食道切除術を施行し、術後病理組織検査診断にて pT3M0 あるいは ypT3M0 であった食道扁平上皮癌症例 160 例を対象として解析した。全症例における生存期間、予後因子に関する単変量、多変量解析を行い、さらに治療介入別､CRM 陽性基準別でも Subgroup 解析を行い､食道扁平上皮癌において CRM=0mm すなわち CAP;R1 が独立した危険因子であり､予後をより鋭敏に反映していること､さらに,CAP 分類に基づいた CRM 評価は、補助療法を施行した症例における予後予測指標としても有用であり、CAP R1 においては補助療法により予後を改善しうることを報告した。これは食道扁平上皮癌外科切除後の臨床病理学的検討報告として、始めて明らかにした臨床的に意義ある論文である。

よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。